

# 二つの小屋

## 二村文人

その一 京都・南座

12月24日(日)。前夜、寝台急行「銀河」東京を発ち、早朝京都に着く。雨模様、わりあい暖かい。昭和四年に建てられた現在の南座は、老朽化のため新年早々にも改築が予定されている。恒例の顔見世も今の建物での興行はこれが見納め。四条通りの向う側から写真を撮っている人が多い。入口で、辛口の劇評同人誌を主宰している宇都宮のS氏に会う。今回は、「上方芸能」という、これも志高く在野精神にあふれる雑誌の編集部が企画した「舞台ウォッチング」という観劇会である。同好の士四十名程が集まり、昔の「総見」とはこんなものかと思う。S氏と一緒に三階右二番の棧敷へ。昼の部10時開演。○「種時三番叟」30

分。富十郎の三番叟に智太郎の千歳。しばらくは扇雀が出ているのかと見聞違えるほどよく似ている。九十翁の清元志寿太夫は、さつきかくしゃくとして廊下を歩いていた。○「將軍江戸を去る」55分。かつての寿海に代わって徳川慶喜は吉右衛門。富十郎の山岡鉄太郎に福助の伊勢守、口跡の良い人達なので舞台に緊張感がある。幕間に仁左衛門のサインをもらうべく楽屋を訪ねる。南座には、設計するとき楽屋を作り忘れ、あとから客席の上に継ぎ足したという信じられないような話が伝わっている。高齢の松島屋は地下の急ごしらえの部屋にいる。意を決して扉を押すと、物置きのようなところの奥にのれんが掛かっており、外に長男の我當が出を待っている。結局、目の不

自由なためにサインはすべてお断わりということでむなしく引き揚げたが、束の間南座の裏側をのぞいたような気がする。○「酒屋」60分。昭和54年、初めて顔見世を観たとき、鷹治郎が一世一代でお園を勤めた。こつりとした「口説き」が印象的だった。今秋、その鷹治郎の三代目を襲名する扇雀が、お園と半七を早替りで見せる。三勝は次男浩太郎。富十郎はここでも宗岸を付き合っていて大忙しだ。○「菊畑」70分。仁左衛門が歌舞伎座の「新口村」で花道から落ちて休演したと聞き、もう再起は難しいとあきらめていたのが見事に復活、その仁左衛門の鬼一法眼に孝夫の智恵内。芝翫の虎蔵が華やかで初々しい。仁左衛門は声にハリがあり表情も豊かで、年齢や病後をいささかも感じさせない。聞くところによると、元気なうちに桜丸をやりたいという希望もっているらしい。きつといい桜丸だろう。残念ながら残された時間は多くない。何とか実現出来ないものか。皆鶴姫の手を引いてソデに入るのだが、実際には足許の覚束ない仁左衛門を松江の皆鶴姫が支えている。手を引かれているように見

せながら手を引いて行く……これは大した演技だよとS氏の話。⑤「千本桜・四の切」75分。猿之助の宙乗りは、顔見世では初めてだという。門之助が静御前に回ったので、義経は信二郎でやや手薄。ふだん猿之助と一座していない人がゴチソウで出たら面白いのに。狐忠信の宙乗りは、舞台の上の破風屋根や三階まである棧敷が背景になって見ごたえがある。観客の拍手がいつの間にかシャンシャンシャンという手びょうしになっちゃったのには驚いた。終演後、祇園の料亭美登幸で懇親会。また京都に新しい知り合いが増えた。夜、ホテルの廊下で門之助に会い、思わず声をかける。歌舞伎座の初芝居で、延若の「操三番叟」に千歳を勤めるといふ。そう言えば、今年の顔見世のマネキには河内屋の名前が見えなかった。さびしい限りだ。

### その二 上野・本牧亭

1月10日(水)。都内唯一の講談定席本牧亭が、今日限りで長い歴史に幕を下ろす。5時半前、上野広小路に駆けつける。二階へ上がると、客席はもう八分の入り、後方にはニュースカメラがずらりと並ぶ。高座

では二つ目の貞一が「天保水滸伝」を読んでいる。「お膝送り」が予想されるので、一番後ろに陣取る。企画・進行を担当する貞水が上がって挨拶。以下、当夜のプログラムを――。○琴梅・琴柳・琴調・琴葉、宝井一門の挨拶。琴柳は修羅場をひとクサリ。○陽子・紫・紅・茜、神田派の女流が「南部坂雪の別れ」。二つ目に昇進したばかりのふづき改め茜はもう涙ぐんでいる。ここでお膝送り。後ろは立ち見客でいっぱい。○愛山・山裕・琴調、講談のイントロ当てクイズ。○5時55分、小山陽「寛永三馬術・愛宕山」。○貞花・貞心・貞山・貞一、一龍斎のそれぞれが思い出を話す。貞山は、改築前の本牧亭で、外は雨、わずかの客を相手に琴窓老人がシトシトと読んでいた光景が目に残っているという。○照山・翠月・鶴女・南陽、一鶴門下の挨拶。○6時35分、協会に復帰して間もない伯龍「柳沢采女」。○一鶴「本牧亭の由来」。○貞水「三方ヶ原」。席亭の亡夫、一つ穂の名人春本助郎の遺品の紋付で、入門当時を思い出しての修羅場。落ち着かない雰囲気の中できちんと読む。○貞丈「姉川合戦・木村

又三」。短く読んだあとと色紙のオークション、出演者の寄せ書が一枚二万円であったという間に完売。○芦州先生が白衣の天使のいでたちで現れて「旅の夜風」を歌ったものだから、一同あつげにとられる。若手がつなぐ間に着物を替えて再登場し「水戸黄門」。○山陽「和田平助の鉄砲斬り」。関東大震災前日の人形町末広が伯山独演会だったことなど、話の興味は尽きない。○8時20分に入場。再び幕が開くと、協会の全員が並んで口上(何故か馬琴の姿がない。またメモ事でなければ良いが)。最後は三本締めで少し早目の8時50分にハネた。飲んべえの芦州さんが泣いている。ヒゲの一鶴さんも泣いている。皆愛すべき人達だ。帰り道、私はコートのポケットの中で「鶴の九」の下足札を堅く握りしめていた。夜空を見上げると、雲の流れが早い。